

## **フランス語をめぐる学びのコミュニティづくり**

### **Conception de la communauté d'apprentissage du français**

岩田 好司, IWATA Yoshinori, Université de Kurume

熊野 真規子, KUMANO Makiko, Université de Hirosaki

國枝 孝弘, KUNIEDA Takahiro, Université Keio-SFC

Modératrice : 今中 舞衣子, IMANAKA Maiko, Université Préfectorale d'Osaka

#### **Introduction : 趣旨説明**

今中 舞衣子

**IMANAKA Maiko**

**Université Préfectorale d'Osaka**

**maikoimanaka@gmail.com**

À l'occasion de la table ronde du samedi 31 mars 2012 au Centre Franco-Japonais / Alliance Française d'Osaka, nous avons abordé le thème de la conception de la communauté d'apprentissage, qui était un de nos deux thèmes centraux des Rencontres Pédagogiques du Kansai 2012.

Nous pouvons donner plusieurs exemples de communauté dans le contexte de l'apprentissage du français: un groupe de travail dans une classe, une activité collaborative entre étudiants francophones et japonophones, un réseau social d'apprenants sur internet, etc... Les RPK elles-mêmes sont une communauté d'apprentissage où l'on travaille ensemble pour améliorer les pratiques de l'enseignement.

Pour cette table ronde, nous avons invité trois panélistes pour parler de diverses approches de la conception de la communauté d'apprentissage. Yoshinori IWATA, de l'Université de Kurume, a présenté sa pratique de classe, basée sur la théorie de l'apprentissage collaboratif. Makiko KUMANO, de l'Université de Hirosaki, a parlé de son activité sur son site internet et du cercle francophone qu'elle anime, en attirant l'attention sur les problèmes rencontrés. Enfin, Takahiro KUNIEDA, de l'Université Keio-SFC, a traité du sujet de la communauté d'apprentissage hors classe, qui favorise la continuité de l'apprentissage du français, et il a donné des exemples de son expérience avec Twitter.

La discussion nous a permis de soulever une problématique importante : jusqu'à quel point doit-on ouvrir (ou fermer) la communauté d'apprentissage? Nos trois panélistes, sans exception, ont posé la question du rapport entre professeur (facilitateur) et apprenants.

## Rencontres Pédagogiques du Kansai 2012

Quel environnement d'apprentissage proposons-nous, et quel rapport cherchons-nous à concevoir quand nous, les professeurs, nous mêlons à la communauté d'apprentissage? Ces questions nous mènent directement à une réflexion sur ce que nous entendons par l'apprentissage des langues et des cultures.

今回の Table Ronde では、今年度のランコントルの全体テーマのひとつでもある、「学びのコミュニティづくり」について考えました。

フランス語学習をフィールドとする学びのコミュニティには、教室でのグループワーク等によってうまれる互恵的な学習集団、学生が主体となったフランス語圏の留学生との活動、フランス語学習者同士でつくるインターネット上のソーシャル・ネットワークなど、さまざまな例が挙げられます。また、ランコントルのようにフランス語教育に関心のある参加者が集まる研究会も、ある分野に特化した学びのコミュニティであると言えるでしょう。

本 Table Ronde では、フランス語教育を実践の場とする3人の先生方をお招きし、学びのコミュニティづくりのためにそれぞれどのような実践をされているのか、それによって何をめざすのかをお話しいただきました。

まず、久留米大学の岩田好司先生が、協同学習の考え方や技法をふまえたクラスづくりについて、実際にアクティビティーを含む体験型の形でご発表くださいました。次に、弘前大学の熊野真規子先生が、フランス語ホームページやフランス語サークルなどの活動について、運営にともなう課題も含めてお話しくだけさいました。最後に、慶應大学の國枝孝弘先生が、教室の外に焦点をあて、学びの継続性を促す仕組みとしての学びのコミュニティづくりについてお話しくだけさいました。3名の先生方からのご報告は、次ページ以降をご覧ください。

シンポジウムを終えてみえてきた課題は、学びのコミュニティというものをどこまで開いたもの（あるいは閉じたもの）として想定するか、ということでした。3名のパネリストの先生方は共通して、教師（ファシリテーター）と学習者の関係性について問題提起をされています。わたしたちがどのような学習環境を提案し、どのような関係性をめざして学びのコミュニティに参加していくか、という問いはそのまま、わたしたちが言語や文化の学びというものをどのようにとらえるのか、という問いへとつながっていくのではないのでしょうか。

### 協同学習を用いた学びの共同体づくり

岩田 好司

IWATA Yoshinori

Université de Kurume

日本協同教育学会認定トレーナー

[iwata\\_yoshinori@kurume-u.ac.jp](mailto:iwata_yoshinori@kurume-u.ac.jp)

#### 1 はじめに

シンポジウムの報告にあたって、まず、予稿集に掲載した発表要旨を再録します。次に、当日の発表で付加、強調したことを報告し、最後に会場からの質問への回答と全体的な感想を述べます。

### 2 発表要旨

私は、協同学習を用いてクラスづくりやクラス運営をしています。学生たちの学び合いを促進していくと、その結果として自然に学びの共同体ができあがっていきます。互助互惠を基盤とし、互いの学びに責任をもつ学習共同体です。

このような共同体形成がなぜ可能なのかというと、プレオナスムになりますが、互助互惠がまさに協同学習の原理だからです。協同学習を行うとは、自分と仲間のために助け合いながら学習することだからです。

協同学習には協同の原理に基づいた様々な技法があります。それらの技法を用いながら学習活動を構造化していきます。最初はコマ切れな構造を連続させていきますが、学習者が協同に熟達するにつれて、様々な構造を組み合わせたり、複雑な構造を使ったりしながらグループの自律性を高めていきます。協同に熟達することがなぜ可能かということ、これは重要な点ですが、協同学習が同時学習だからです。協同学習とは「協同しながら学ぶと同時に協同することを学ぶ」、つまり内容とプロセスを同時に学ぶ学習法だからです。フランス語教育に即していえば、学習者はフランス語を学ぶと同時に協同することを学ぶのです。

協同学習に対比されるのが競争的な個別学習ですが、そこで同時に学習されるのは、いかにして他者に秀でるかということです。この議論は複雑ですが、フランス語教育を教養教育、学士課程教育、市民性の教育など、より大きな展望でとらえた時、協同できる学生を育てることは非常に重要なことのように思われます。

もちろん学習効果もあがります。協同学習に関しては膨大な実証的なりサーチが行われてきましたが、その圧倒的な効果については、実際に協同学習を試みしてみると首肯できるでしょう。

協同学習は教室を学びの共同体に変容させます。同様に、協同学習の考え方や技法を用いて教師の同僚支援グループやサイバー空間のグループを「学びの共同体」に変容させることも可能です。互助互惠関係を構造化によって促進していくと、次第に「足場」としての構造が必要なくなり、そこに自律的な共同体が出現するわけです。

### 3 当日の発表での付加、強調点

#### 3. 1 ケベック州における協同学習

発表当日は、協同学習を体験的に理解してもらうために、いくつかのアクティビティーを取り入れた。まず、なるべく面識のないペアで座ってもらい、自己紹介しあってもらった。他者性＝多様性を乗り越えて関係性を構築することの困難さと重要性を納得してもらうためであった。

その後、ケベックスタージュで用いられていた「協同的アプローチ (Approche coopérative : A.C.) の基本理念」というスライドをもとに問題提起を行った。要点としては、①A.C.はケベック州において、その有効性ゆえに、ますます用いられるようになっていくこと。②A.C.は(他のアプローチ同様)相互作用、協同、目標、評価を必要とすること。③A.C.は互惠的相互依存、多様性、実際のコミュニケーションを重視すること。④A.C.は認知、社会、心理面、

## Rencontres Pédagogiques du Kansai 2012

およびクラス運営面での効果があること。⑤教師はグループ活動のアニメーターとなること、である。

以上の説明の後、「確認タイム」という協同作業を行った。まず、「個人思考」として、学んだことを1人で確認し、次にペアで話しあって理解を深めるというアクティビティーである。協同作業を行う前に、できれば「個人思考」の時間をとることの重要性を強調した。また、ケベック州でのフランス語教育や教員養成教育にA.C.が用いられている背景には、北米で構築主義的教育や構築主義的学習理論であるA.C.が広く普及しているコンテクストがあることを説明し、フランス本国でのスタージュにA.C.が欠如していることは残念である旨を付け加えた。

### 3. 2 協同学習の原理

ケベックで紹介されている「協同的アプローチの基本理念」を補足する形で、協同学習の原理を説明した。まず、導入アクティビティーのように、面識のない異質なメンバーを組み合わせて多様性から学ぶことの重要性。目標を共有することによって生み出される互惠的相互依存関係。アクティビティーにおける役割と責任の明確化。平等な参加。非言語コミュニケーションなどの協同の技能。アクティビティーにおける私自身のファシリテーションをモデルとした、グループの自律性と教師の役割などを、参加者の会場での体験に言及しながら説明した。

### 3. 3 学び（合い）の共同体とその意義

以上のような原理に基づいて協同学習を進めていくと自然に、1人1人の学習者が、互いを尊重し、支え合い、助け合う民主的な学び（合い）の共同体が形成されていくのであるが、このプロセスを通じて学生を、協同できる市民、社会人に育てることが協同学習を用いた学びの共同体づくりの目指すことである。これが、シンポジウムの企画者である今中氏の問いかけ＝「何を目指して学びのコミュニティーをつくるのか」に対する私の回答であった。

### 3. 4 協同学習の効果

ケベックスタージュ「基本理念」④に関し、協同学習が学習面での効果のみならず、仲間作りや自分探しなどの社会性面、心理面に効果があり、また、クラス作りが促進される結果、教師の役割が学びの促進者へと変容していくことを強調した。

### 3. 5 技法

協同学習の技法は200近くあると言われているが、基本的な技法はもっと少なく、原理を理解すれば臨機応変に応用できる。教員の勉強会、会議、オンライン学習にも簡単に用いることができ、発表者は実際、様々な状況で応用している。本発表でも、「確認タイム」、「ラウンドロビン」、「シンク＝ペア＝シェア」、「質問タイム」などを紹介しており、ぜひ、使ってみてほしい。

## 4 質問への応答と全体の感想

### 4. 1 適用具体例

会場から、協同学習の具体例を示してほしいという要望があったので、ラウンドロビンを取り上げた。ラウンドロビンは小グループで輪になり、順番に発言する協同学習の代表的技法である。具体的応用例としては、授業を始め

## Rencontres Pédagogiques du Kansai 2012

る前に、毎回、ラウンドロビンで1分間スピーチを行う。授業は参加者がグループ学習、および個人学習を自ら計画、実行し、評価方法も自ら提案するというコンセプトに基づき、ラウンドロビンを基本として参加者同士で話し合い、また、発表する。教員は要望があれば特定の項目に対し「授業」を行うが、グループファシリテーションを指導することを主たる役割とする、という具体例を説明した。

### 4. 2 ラポールの必要性

シンポジウムを通じて浮かび上がってきたことは、ラポール（親密な人間関係）をいかに構築し、維持していくかということであったように思う。ホームページ作成にしろ、イベントやICTの利用にしろ、目標を共有し、その実現に向けて協力していくことは、ラポールの形成を促進する。ラポールさえできあがればそれでいいというわけではないが、ラポールという土台なしには、いかに高度な教育学習理論も空虚であろう。

協同学習理論の背景には葛藤解決理論があるのだが、その基盤は信頼関係（ラポール）と協同である。不信感を一時カッコに入れ、解決に向けて協同するとき創造的な解決策が生まれ、信頼関係が同時に醸成される。このプロセスは私たちの日常生活から国際紛争にまで見られるものであり、なによりも教育の現場で学んでほしいことである。協同学習はそのための理論と実践である。

### 5 おわりに

学習コミュニティにおいてファシリテーターとなった教師はどのようにして学習者とラポールを構築したらよいのであろうか。新たな課題として考えていきたい。

## 弘前大学フランス語ホームページの試行錯誤

熊野 真規子

KUMANO Makiko

Université de Hirosaki

kumano?cc.hirosaki-u.ac.jp

どのように働きかければ、現在の学生は「自分で学ぶ」ようになるのだろうか。弘前大学では、2008年4月に開設したフランス語ホームページ《Place de la Francophonie》／「フランコフォニー広場」<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/french/>、さらにはホームページを拠り所に活動するCercle Francophone／フランス語サークルを通じて学びのコミュニティづくりや、学習者の支援を行ってきた。シンポジウムでは、これまで出逢った課題を明らかにしつつ歩みや現在の構成などを報告した。（詳細はアトリエの方で報告）。

弘前大学のフランス語ホームページは、仏文学科やフランス語科のような専門科のホームページではなく、第2外国語としてフランス語を学ぶ学習者を対象としたページである。また、在学生のみならず、卒業生、留学生、地域のフランス語学習

## Rencontres Pédagogiques du Kansai 2012

者、francophones の交流の場をめざしてスタートした点も地方大学ならではの特徵ではないかと思うが、開設後、さまざまな運営上の問題と格闘するなかで、「外へ開く」方向についてのコンセンサスは得られていなかったのではないかと指摘も受けている。

ホームページの内容は、試行錯誤を重ねてバージョンアップしており、卒業生や学外者からは評価されているが、肝心の在校生があまりアクセスしていないという課題がある。当日は、アクセスを促し、学生の学習成果の発表の場としてホームページを活用しているページをいくつか具体的に紹介した。人文学部で開講されているフランス語実習 IA-IIA (一般教育のフランス語 I.II の履修を終えた学生対象だが、実質的には仏検 5 級~4 級程度) 受講生による「留学生コラム」の翻訳、「ナタリー河岸」の翻訳を経て、現在は発信型の「弘前直送便」の写真ルポを課題にしている。1 年生のアクセスを促すしかけや課題も必要ではないかという意見がフランス語スタッフから出ているが、具体的な実践はまだ行われていない。

ホームページは、更新作業にあたっている学生メンバー、教師が盛んに学生に働きかけているクラスでも、言われた時だけ見るという状況が多い。つまり、現在の弘大生に関して言うと、働きかけ続けなくては見てもらえないということがわかる。このあたりがフランス語科などの専門セクションが作るホームページと差があるところなのか。囲い込みでなく、外へ広がる方向を目指す「しんどさ」が伴う点である。

次に、ホームページのオフ会的な位置づけの **Cercle Francophone** の変遷の報告である。ホームページ開設後一年以上を経て、「読書会」(『神の雫』フランス語翻訳版) の形で立ち上げ(を働きかけ)たが、中心的存在であった熱心な学生がボルドー大学に留学してしまうや活動休止状態に陥る。さらに一年が経過する頃、英語圏の留学から帰国した学生の提案で読書会ではない、会話・交流中心のサークル活動としてリニューアルすることになった。

活動を活性化するため、活動内容のリニューアルと同時に **Cercle Francophone** の活動報告ページをホームページ上に設け、さらに更新作業の問題を解決すべくグループ化したばかりの更新担当の学生たちをなかば強引に活動へ誘うことで、ようやく軌道に乗せることができたといえる。

シンポジウムでは、活動報告のいくつかを具体的に紹介し、活動報告に含まれている「まちなかフランス語」(まだ軌道に乗せられていない地域の学習者との活動)、さらに 2011 年 11 月~2012 年 1 月まで行われた“**Atelier de Mickaël**”(教授経験を積みたいとの本人の希望ではじまった FLE 専門ボルドー第 3 大学留学生による授業タイプの活動)についても触れた。“**Atelier de Mickaël**”には、「まちなかフランス語」参加経験者とその学習仲間が参加しはじめていただけに突然の終了が惜しまれるが、このような不安定さがサークル活動の、とりわけオフ会的な位置づけの活動の弱点である。オフ会的なものではなく、大学の正式のサークルにした方がいいのではないかという逆方向の提案もスタッフ内からある。

ブレイク・スルーしたかに見える瞬間がある一方、活発な学生が留学してしまう、学生は卒業してしまう、留学生は帰国してしまうなど、一気に下火になる要因があ

## Rencontres Pédagogiques du Kansai 2012

ふれており、恒常的な質、盛り上がりを維持するのが難しい点がオフ会活動の課題である。また、ホームページ更新作業、サークル活動に共通の課題として、試験・レポート期間、学休期間の問題がある（これはやむを得ないこととするのか、「まちなかフランス語」を軌道に乗せることで、よりコンスタントに活動する状況をつくり、学生に刺激を与え続けるべきなのか）。

ホームページならびに **Cercle Francophone** を通じて常々考えさせられるのは、学びのコミュニティを外へ開くか、内に囲い込むか、あるいは、自主性を待つこと、強制することの匙（さじ）加減である。コンセンサスが得られていなかったとの指摘もあるとはいえ、外へ開く形を理念としスタートしたホームページであるからには、学生への刺激や効果を見極めるべく、その方向性の改善策をさしあたっては模索していきたいと思う。

シンポジウムではほとんど触れられなかったが、2011年12月からはじめた Facebook ページの活用（おもに **Cercle Francophone** での活用。ホームページよりもタイムラグの少ない活動告知／活動報告が可能。学外者への利便性、各人からの呼びかけやイベント告知などができる点などが期待できるなど）、2011年12月から学生のニーズにより近づける内容と頻度で活性化した Twitter（非常勤講師・工藤貴子氏の協力）のフォロワー増加を働きかけ、その後の変化をみたいと思う。

ここ一年間のホームページへのアクセスは、学休期間はやや落ちるものの、毎月国内から450~700アクセス、フランスなどから50~60アクセスである。なお、シンポジウムで國枝氏が弘前大学ホームページについてツイート、また RPK のスタッフ・参加者が Facebook や Twitter をフォローして下さったことで、これまでに見られなかったアクセス層・アクセス地域の変化がみられたことを申し添えます。

弘前大学フランス語ホームページ・RKP2012の報告ページ

<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/french/espaces/evenements/rpk2012.php>

## 教室から遠く離れて

### —学習の継続と「学びのコミュニティ」—

國枝 孝弘

**KUNIEDA Takahiro**

**Université Keio-SFC**

**kunieda@sfc.keio.ac.jp**

教室の中の学習活動においても、教室の外という学習環境においても「学びのコミュニティ」は、重要なファクターになりえますが、本発表では考察の対象を教室の外に限定して話を進めました。それはコミュニティの存在が、「学びの継続性」、すなわち教室の外に出た後でも学び続ける学習者の態度・意欲に深く関与しうると考えたためです。

本発表では、さまざまな学習者の結びつきをうながすコミュニティの場として、

## Rencontres Pédagogiques du Kansai 2012

1) 教室以外の「実」空間と、2) IT 技術によって可能となる「ネット」空間の二つにわけました。

1) は、主に大学において、教室以外でも、さまざまな学習者が集うことのできる空間の必要性を指摘しました。共同研究室、カンバセーションルーム、自習ルームといった場所を紹介しました。教室で出会うのは、まず自分と同じレベルの学習者と教師だけなのに対して、こうした場所はさまざまなレベルの学習者、例えば、ちょっと上の先輩、ちょっと下の後輩に出会うことができます。またカンバセーションルームや自習ルームは、教科書から「解放」されて、自らの興味にあわせて勉強できる場所です。教室の枠組みを越えた学習者のコミュニティ、学習環境を整備することが、学習に対する新たな意識化のきっかけを与えるのです。

2) は、ITをCALL教室のような閉じた空間で利用するものではなく、あくまで教室の外で用いるツールとしてとして捉えました。そしてここで言われるITをWEB ページやpodcastなど、教材として利用する場合と、時と場所を離れた学習者同士をつなぐメディアとなる場合に分類し、今回は後者にしぼって発表しました。

### - Twitterの利用

まず2011年秋学期に私のクラス（学生数18名）が行ったtwitterの交流の試みについて報告しました。これは毎週の授業の後で、学生にtwitterで授業で学んだポイントをつぶやかせ、教師がそれぞれに返信をするという試みです。学生全員が教員をフォローしているので、教師の返信とその返信のもとになった学生のtweetの内容を全員が共有できるというものです。それによって、1) 授業の後につぶやくことで、学んだことを意識化する、2) 他の学生のtweetを読むことによって、自分では気づかなかった授業の内容に気づく、3) 教師が返信をすることで、ひとりひとりにあわせた学習アドバイスができる、ということをおねらいとしました。

その結果、ほぼ全員が毎週tweetをし、内容もまず重なることはなく、多くの知識が共有できました。学生に行ったアンケートでも、他の学生のtweetや教師のコメントが参考になったという声、もしすでに自分がつぶやきたい内容を他の学生がつぶやいていた場合は、他のポイントを探したという声も聞かれました。さらにはこのtweet上でやりとりが教師と学生の、そして学生同士の交流に役に立ったかという問いに関してはほとんどの学生が肯定的な評価をしていました。

しかしながら課題もありました。それはtwitterが交流には役立つとしても、そのこととフランス語能力の向上（あるいは深化といってもよい）とは別の問題だという点です。

### - 遠隔テレビシステムの利用。

では、フランス語能力の向上（深化）といったとき、それは具体的に何を指しているのか。その問いにひとつの答えを与えてくれる活動として遠隔テレビ会議を紹介しました。発表では、日本でフランス語を学ぶ慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスの学生とフランスで日本語を学ぶパリ・ディドロ大学の学生との3回の遠隔テレビ会議の実践を紹介しました。1回目は自己紹介、2回目は就職活動について、ファッションについて、3回目は学生生活について、ディスカッションを行いました。



## Rencontres Pédagogiques du Kansai 2012

その会議でのやり取りから観察されたことは、遠隔テレビ会議においては、「おしゃべりから議論へ」、「友だち作りから対話者作りへ」とシフトするきっかけがあったことです。具体的には、議論がフランス人の制服に対するこちらにとっては大げさとも思える拒否反応から始まり、議論は教育と自由へ、68年へと広がるということがありました。また日本の学生が、自分の研究テーマが、フィリピンと日本の関係をケーススタディとした移民問題であると話したとき、フランスの学生にとってフィリピンの看護師の問題はなじみのないものでした。このように議論が深まれば深まるほど、学習歴2年程度の学生にとってはフランス語力が追いついてゆかなくなります。しかしディスカッションにのぞんだ学生は、その場で生まれてきた問題をより深く考え、そしてそれを相手に伝えようという意欲がわいたようです。こうした機会が遠隔テレビ会議が終わっても、自らが探究してゆこうとする原動力となると考えます。そしてそれがひいては、社会の事象を分析、判断し、批判精神を養いながら、さまざまな意見を持つ他者と対話を深める力の育成につながってゆくのではないかと発表を締めくくりました。

学習は教室での学習活動で終結するものではありません。むしろ教室を出た後にいかにして学習を継続するのか、その「継続性」が鍵となります。そしてその継続性を促す仕組みの一つが「学びのコミュニティ」にあると考えます。

ただし「学びのコミュニティ」といっても、twitterに見られたような交流に重きが置かれるもの、そして遠隔テレビ会議のように（主題やメンバーに依ることが多いのですが）、会話が議論となり、他者との接触を契機に考えを深める契機になるものもあります。

大方の学生に対して、外国語を学ぶ意義として、孤独に本を読むことに求めることは難しいでしょう（もちろんそうした活動は必要です。本との対話なしに考えを深められることはありませんから）。それよりも生身の他者とどう関わってゆくのか、外国語はその他者性が母語を共にする他者よりも明らかに強いわけですから、そうした他者とともいかに共同性を構築してゆくかということが大きな意義になると考えます。

会場からは「なぜ数ある SNS のなかで twitter なのか」というご質問をいただきました。それにたいしては多くの学生にとって、twitter が最も身近で気軽なメディアであるからとお答えいたしました。また会場では話す時間はありませんでしたが、もう一つ考えていたことは私が去年 NHK のフランス語講座を担当しており、フォロワーの中に視聴者がかなりいらっしやり、大学を離れて学ぶ学習者にとっても、大学の学生に対してつぶやいている内容を見ることは、フランス語学習の一助になると考えたことも twitter を選んだ理由のひとつでした。

また「twitter のようなメディアは特に教師のプライバシーに学生が踏み込んでくることが懸念されるのではないか」というご質問をいただきました。これに対しては「いったい私たち教師が学生とどういう「関係」を築いてゆくのか、私たちの人間性と、そして彼らの人間性がどこまで触れ合うべきなのか、まさに他者といかに共同性を構築してゆくのか、そこから考えなくてはならないとお答えいたしました。